

へば「痛はしや三十六騎も、一ツ枕に只や  
 みくく討伏る」隆信の年を申せば五十一、  
 頼て隆信の首を太刀の先に貫きて、小松原の  
 本陣を心静に引て行く、頼て小松原にも成ぬ  
 れば、鍋島丹洲、添島右衛門彼の二大將の者  
 共、此由を一目見るより、借は中々あれを見  
 よ、薩摩軍衆が何時の間に奥の陣にもれたか  
 な、主は討る、手勢は持たず、我が君の敵、  
 何國迄も落行ぞ、逃すまじと言ふより「早く  
 切て掛れば、川上殿心得たりと言儘に、向ふ  
 たる先は只一筋に切て通れ、士卒に下知を  
 なし、寄せ来る敵は群がつて、追つまくりつ  
 受つ流しつ、爰を詮度と戦へば」「向ふ敵數  
 多討取、仕すましたり、味方の陣に引て行く  
 「頼て隆信の首を實檢に備へければ、中務殿

心得たりと、小高き所に馳上り「大音揚て、  
 肥前の大將龍造寺山城守隆信を、川上左京久  
 堅が打取たりと呼ばはひて、勝鬨を三度聲こ  
 揚げ給へば」薩摩軍衆は是を襲ひ、三ヶ國の  
 勢は一手に成りて、肥前方落行勢に掛合せ「  
 可鐵砲を放ち掛、おめき叫んで戦いければ、  
 痛はしや肥前軍衆は、秋の田の水にはあらね  
 共、つまりくに切て落さる、者は數知れず  
 斯る所に島津又七殿は、鍋島が落行所を目に  
 掛、駒を早めて、いかに申さん鍋島殿、何國  
 迄落給ふぞ、斯く申す某は薩摩に於て、島津  
 家久が嫡子、島津又七は某也、今年歳は十  
 三歳、軍は今日が初め也」「此度の合戦に打  
 死致す者也、我を討取て高名せよと、大音揚  
 て呼ばひければ」鍋島も落行駒の手綱を引返

し、太將は打たれ手勢はなく、何の力でも軍致さんご、馬より飛び下り、甲を抜て一降参するこそ哀れなり」又七殿思召す様、降参したる士を討て捨てはいか、せんといかに申さん。鍋島殿、鳥津の家を如何なる者ごや思ふらん、恭くも清和天皇の御末なれば、鳥津方に二度弓を引く事無益なり」此度の合戦は赤星が敵軍の事なれば、國取る迄は及ぶまじ、肥前の城は御邊に預け置ごぞ仰ける、鍋島は太いに喜び、三度禮して御前を下り「肥前をさして急がる、」其後中務殿は、討死有る首賦を召れける、肥前方には龍造寺山城守隆信を初めとし、士大將百三十五人、其外總勢一萬千七百餘騎ごぞ聞へける、薩摩方には稻留猿渡を初めとし、上下共に八百餘人、扱も討死

せし隆信の首を實檢に備へければ、頓て隆信の首を太刀の先に貫き、小高き所に差揚げて島津屋形を軍神摩利支尊天ご伏し拜み、誠に島津方は今生後生忘れ難しご悦び給ふ事限りなし、爰に又八代御前は此首を見れば、兄弟の子供の事が彌増る由、烏丸にて蹴上げ蹴下し、七度が間氣色をなして、八度目に納め置「川上殿は此由見るより、大に腹を立て、士が太刀の先にて取たる首を、女の手足に掛けてはいか、せんご有ければ」又七殿進み出申されけるは、いかに申さん川上殿、古へより女童言傳への有るが誠也と宣ひて、様々川上殿の心を取直し給ひけり、其年の年號申せば、天正十二年甲申、頃は三月十四日也、其日の支干は辛の卯、源氏の氏神「正八幡の御縁日

「世の中は何と聞ても唱へても、憂きは世の中、つらきは隆信、きをひは薩摩方、物の哀れを留めしは、赤星が兄弟の子供にて「諸事の哀れを留めけり」。

●木崎原合戦 初段

情々世間の現象を観するに、積善の家には餘慶あり、積悪の家には餘殃あり「尤慎むべきは此道也」「爰に薩隅日三州の大守、鳥津修理大夫義久と申し奉るは、恭も清和天皇の御苗裔」鎌倉右大將征東大將軍、源頼朝公の御子、左衛門尉忠久公より十六代目の御嫡孫也文武二道の名將にて、上を敬ひ下を撫で、仁義正しくましますば、靡かん草木はなかりけり、御舍弟には兵庫頭忠平公、左衛門尉歳久

公、中務太輔家久公逆、何れも文武の名將なり、其外家の子郎等に至るまで、皆忠勤を勵ませば、古今稀なる御果報、近國他國の者迄も「羨まざらんはなかりけり」「是は扱置爰に又、大職官の御末に、伊豆の國の住人、伊東入道若心が末孫に、伊東左京義祐逆、弓取一人おはします」其比日向國都の郡に住給ふ其心飽迄不敵にして、仁義の道を學ばず、上を敬ひ下を憐む心なく、我意に任せて舉動へば、恐れぬ者こそなかりける、去れば古人の言葉にも君臣を見る事手足の如くする時は、臣君を見る事服心の如くす「又君臣を見る事土芥の如くする時は、臣君を見る事、唯寇讎の如くす」曰はく義に従ふ時は聖也、諫に従ふ時は賢也、然るに義祐道に違ひし有様を、

譜代好みの家臣共、諫言すと雖も、曾て用ゆる心なく、却て疎み遠ざける。「心の内こそ淺ましけれ」大慈心の餘りにや、大隅薩摩に發向し、我れ三ヶ國の主と成て、子孫榮華に盛んと、明礬手便を廻らせ共、飯野の城には兵庫頭忠平公、智仁勇の三徳を備へ給へば、小勢を以て叶ふべき様は更になし、去れば球摩の城主相良に加勢を乞はん迎、家の子に伊東加賀守祐安と申者あり、是を近付け、事の様子を含め、相良方へぞ遣しける、頓て球摩にも成ぬれば案内乞て内へ入る、直に相良に對面し、能こそ御出候也、事の仔細を聞く上は、必ず御加勢申さんご、左も潔き返答す、先首途を祝はんご、酒なご様々進めつ、約束違はん其爲に、小金作の太刀一振、加賀守

へぞ引れける、祐安悦喜限りなく、約束堅く相極め一日向を差してぞ歸りける「義祐此由を聞召し、斜に悦び、家の子郎等相集め、内議評定取々也、爰に野尻の城主に、福永丹波守祐友といふ者あり、仁義を守る勇士にて、少しも憚る所なく、進み出申様、某退て愚案を廻らし候に「彼の島津殿と申すは、悉くも清和天皇の御末、多田の滿仲より以來、弓箭の家に譽れを取り、政道を堅くし給へば」御家の家臣に至る迄、數代の好みを忘る、者迎は聞ざる所也、皆忠勤を勵ませば、心を變ずる者迎は稀にも聞ざる所なり、是は強敵の大敵なり、御當家の兵と申すは、譜代の士少くして、皆方々の假武者なり、殊に相良の何某は、一皮心の表裏心と承れば、無二の味方ご

は言ひ難し、小勢を以て大敵の剛敵へ働き給はん事、譬へば蟻螂の斧を以て、龍車に向ふが如くなり、是は又事新しく申す事にては候得共、御先祖祐高公は、島津久豊を御掣に取給ひ、其威光を以て日向國十一ヶ所を打平げ個様に榮華に榮へ給ふも、是偏に島津殿の御恩なり、恩を得て恩を知らぬは木石に相同じ左こそ佛神三寶も悪しと思召るべし、先我々共が所存には、島津殿の御旗下に成らせ給ひ先陣の御働き忠義を盡させ給ひなば、九州残らず島津殿の御手に入るべし、其時こそ二ヶ國三ヶ國をも島津殿より給はるべし、然あらん時は御家長久、御子孫繁昌たるべき事何の疑ひか候べき、先此度の御合戦は思召留り給へ、平にくこ一理を盡して諫めける」義祐

素より無道人の事なれば、以ての外に腹を立て一今に始めん福永が、賢人達の可笑さよ、理非は兎もあれ角もあれ、球摩に約束する上は「一早打立て者共、周章ふためき勢揃へ先一番に伊東加賀守祐安、同じく新三郎祐信を兩大將として、七百餘騎を差遣し、頼て福永を前に召れ、いかに福永弓矢の家に生れ来て、臆病未練の舉動かな」我に二度對面無用と言ひ捨て、我が身も二千餘騎を引具して二陣に續き出給ふ」天理に背く此度の、合戦危しと言ん者こそなかりける、兎にも角にも義祐の「心の内こそ淺間しけれ」。

●全貳段

去程に飯野にまします、兵庫頭忠平公は、智

惠第一の大將なれば、兼てより伊東方へ忍びの者を入置給ふ故「此事早く聞召れ」一方々の味方くへ飛脚を越して告給ふ、先一番に菱刈表の軍兵共、勇み進んで馳集り、「忠平公を始め、川上三河守忠智、同助七忠賢、上原長門守、山田新助、同名彌九郎、村尾源左衛門尉、五代勝左衛門、比志島紀伊守、喜入攝津守、黒木播磨を先として、屈竟の兵者共三千餘人を相勝り、木崎原の切所くへ伏せ置」伊東勢を菱刈表へ遣り過し跡を取切て皆悉く、打亡さんご待せ給ふ「是を知らて伊東勢早や加久藤迄は發向す、菱刈表の兵者共、願ふ所の幸ひひ、五十騎百騎は爰の峰、彼所の谷のつまりくへに馳集り、関の聲を揚げ、弓鐵砲を放ち掛、おめき叫んで戦ひける

伊東方は小勢にて、球摩の加勢を今やくと待けれご、相良何ごか思ひけん、一騎も勢を出さねば、前後の敵に取圍まれて、十方に暮れて居たりける、斯る所に伊東加賀守の郎等に、「柚木崎丹後守政家ご申者あり」文武二道の勇士にて、黒革威の鎧着て、五枚甲の緒を、「白檀磨きの脛當に、兵庫鎖の籠手をぬき」三十六指たる大中黒の征矢を負ひ、五人張の塗込藤の弓を持ち、鹿毛なる馬に乗りたりしが、進み出で申す様「誠に人の心ご川の瀬は、一夜に替る習ひにて、覺悟の前にて候得ば、今更驚くべき様は更になし」斯る時命を惜み、生んとすれば必ず死す、唯一筋に思ひ切、一方を打破り通るべしご「諸軍勢に下知をなし、小林さして引て行、後れ軍の習

ひにて、我れ先に足を亂して落ければ、跡  
 より敵は群がつて、関の聲を造り掛け、繁く  
 しこふて追懸る、丹後守之を見て、斯ては叶  
 ふべからず、某人跡に踏留りて、防ぎ矢を  
 射て味方を落さん、後陣遙かに引さがひ、  
 爰に控へし兵は、伊東の郎等、油木崎丹後守政  
 家と申す者也、近國にも隠れなき強弓の精兵  
 矢次早の手利也、日頃音にも聞せ給ふらん、  
 今は能く見よ汝等共、矢先に敵は嫌ふまじと  
 五人張に十五束引絞り、差取引詰射る程に、  
 矢面に進む兵者共、生死は知らず、二十八騎  
 は射て落す、「此勢に恐れをなして、勝に乗  
 たる島津方の大勢、しごろに成て暫しが程は  
 進み得ず」其隙に伊東勢漸々引て行く程に、  
 木崎原にも成ぬれば、忠平公の御勢「此由見

るよりも、伊東勢は一騎も残らず討取れ、  
 関の聲を嘘と揚げ、おめき叫んで戦ひける、  
 伊東勢も此處を破られては叶ふまじ、面も  
 振らず、進る敵を弓手妻手に打伏せ、切先よ  
 り火花を散し、鎧を削り、鎧を削り、切羽の金  
 も未塵になれ、爰を證度と責戦ふ、未だ勝  
 負も見へざるに、島津方より川上三河守忠智  
 同助七忠賢、上原長門守を先として、物に馴  
 れたる屈竟の兵、五百餘人を相勝ち、兎有る  
 本陣を馳せ廻り、義祐の旗下に蕪地に切て入り、  
 縦横無盡に切立れば、「思ひも奇らぬ伊東勢  
 風に木の葉の散る如く、四方にさつと激にけ  
 る」島津方大勢前後より引包み、追伏せし  
 討程に、時を移さず伊東方、名有る土伊東宗  
 右衛門、伊東權之助、落合源左衛門尉、在土

原四郎兵衛を先として、五百餘人は悉く名乗  
て討死す、其外敵兵共此處や彼處のつまりつ  
まり追詰られて「討るゝ者は數知れず」斯  
る所に伊東加賀守祐安は、落る味方の勢に押  
立られて、心ならずも五町計りは落たりしが  
鬼有る高見に馳上り、臆病至極の奴原共、何  
國迄落行ぞ、返せ戻せと味方の勢を大音揚て  
呼はれど、引立たる勢の事なれば、耳にも更  
に聞入れず、我れ先にこ小林さして引て行く  
祐安心に思ふ様、我れ賤しくも伊東殿の家の  
子と生れ、此度先陣の大將を承り、未だ一軍  
の利も得ず、何の面目ありて古郷へ歸り、人  
々に對面せん、いざ討死せん」と一駒の手綱を  
引戻し、大音揚て名乗様、爰に控へし兵は、  
伊東の家の子に、伊東加賀守祐安と申す者也

君恩を報せん其爲めに、唯今討死致也、我れ  
と思はん者あらば、懸れく、呼はりける、  
島津方に於て、澁谷上總守國重、此言葉を聞よ  
り、嗚呼優しくも返させ給ふ者かな、我れこ  
そ古へ北原が郎等、澁谷上總守國重と申す者  
也、日頃旁々音にも聞つらんと言儘に、一同  
に馬より飛下りて、互に打物拔持て、追つま  
くりつ火華を散して戦ひける、未だ勝負も見  
へざるに、國重いざ組んと討物投捨懸寄るを  
心能くむす組、國重危く見得ければ、國重  
が郎等二人之を見て、主を討せては叶ふまじ  
き、弓手妻手よりむす組、上を下へ返し  
ける、祐安素より大力なれば、物の數共思は  
ず、彼の二人の者共の肘を搔搦み、此處彼處  
へかつば、投捨、國重を心安く取て押へ、己



に首を擡んとする所に、國重が弟軍八坂直  
 兄を打せては叶ふまじと落重り、祐安が草摺  
 をたたみ上げ、柄も拳も通れくこ、三刀刺  
 て呼はる所をはね返し、終に祐安が首を擡落  
 す」「仕済したりと言儘に、凱歌をこつと揚  
 げ、陣所をさして引て行く」痛はしや祐安が  
 歳を積れば、未だ惜しかる三十一、其年の年  
 號申せば元龜三年壬申五月四日なり、國重兄  
 弟の手柄の程は、天晴勇士譽れやと「皆一同  
 に感じける」。

●全三段

去程に、加賀守が耶等二人打漏されて、新三  
 郎に追付き、斯様〜と告げれば「新三郎之  
 を聞き」「偕は中々祐安殿討死とかや、兩大

將の者共が一人は討れ、一人歸りて證もなし  
 「いさ討死せん」と附従ふ者共、一人も残らず  
 落行て、義祐の先途を見るべし、暇取らする  
 是迄なりと言捨て「駒の手綱を引返し、島津  
 方大勢の中へ割て入り、面も振らず火華を散  
 し戦ひしが、向ふ敵七八騎を討取、我身も數  
 ヶ所の疵を蒙り、今は是迄なりと思ひ切、馬  
 より飛下り、自害せんとする所に、敵の兵透  
 間もなく馳來る、祐信心得たりと言儘に、眞  
 先に進む兵者共」「諸膝靡て切伏る、二番に  
 續く兵と引組で差違へ、共に空敷成にける」  
 痛はしや祐信が歳を積れば、未だ惜かる年は  
 生年十七歳、天晴勇士の兵者かなと「惜まぬ  
 人をなかりける」「爰に又柚木崎丹後守政  
 家は、只一人踏止り、是は義祐の耶等に、柚

本崎丹後守政家と申す者也。忠平公の御内に名ある士候は、申上度仔細あり。大音揚て呼はれど、勝に乗たる雑兵共、耳にも更に聞入れず、我先に一討取らん。遮るを、丹後守此由見るより、理非をも知らぬ奴原共、其處立退り。言儘に、遮る敵を弓手妻手に切て捨忠平公の旗本に眞一文字に駆け来る。忠平公此由御覽じて、是は伊東に於ても名有る士に聞く、仔細を答へ。この給へば、旗本の兵者共丹後守の中に取圍む。丹後守は馬より飛下り、「一打物彼方へ捨、いかに方々呼を静めて聞給へ。我等が主の義祐は、鳥津殿の御恩を蒙り、子孫榮華に榮へし人なりしが、斯る逆心を企て、天理に背き申さる。故、今度の合戦は皆悉く敗軍す、家の滅亡遠からず、我々共

も皆鳥津殿に降参申上度は候得共、忠臣は二君に仕へずと、本文の言葉に恥ぢ、唯今爰にて討死致す也。爰に幼少の一子を忠平公に頼み奉つる「哀れ貴さも賤さも、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ知られたり、此事申さん。其爲に、是迄参り候也。」早首召れ候得と、甲を抜て彼方へ捨て、訊問してぞ居たりしが忠平公此由聞召れ、一子の事は扱置、汝も降参仕れ、平はく、宣へば、こは難有き御詮かな。左あらば御暇申さんと、腰の差添引抜き、笛の鎖をかきはなし「朝の露を消へにけり。」大將始め、見る人海に鎧の袖を濡しける。斯様く、打死し、彼方此方に時刻を移す其隙に、大將の義祐は虎口を逃れ、漸々都の郡に落たりしが、鳥津方の兵共、我れ先に追

掛る、忠平公此由御覽なされ、勝に乗り長追して悪かるべし、先引取れや者共さ、諸軍勢に下知をなして引給ふ、忠平公は伊東勢に打勝て、飯野の城に引返し、定めて義祐今度の恥を雪がんと、二度打て出るべし、油断するなとの給ひて、遠見を出し忍びを入れ置、御用心は隙もなし、爰に川上三河、上原長門守を初めとして、家老の面々申す様、臆病神の附果たる伊東勢、何程の事か仕出すべき、此勢に境目を打越し、御働さ候は、手に立者は候まじと、勇み進んで申上れば、忠平公此由聞召れ、此儀尤も去ながら、黄犬却て虎を噛み、鷲鼠却て猫を噛むと言ふ事もあり、伊東も名ある大将、侮りては悪かるべし、假令亡ぶる共、味方大勢打るべし、時節を待てこ

宣ひて、境目堅く打守り一月日を送りておはします、是は擧置伊東入道義祐は、今度木崎原の合戦に、家の子郎等残り少く打なされ、無念至極はなかりける、今一度境目を打越へ餘多の城を攻落し、會稽の耻を雪がんと、明暮手便を廻らせ共、臆病神に誘はれて、妻子を匿し落度支をぞしたりける、爰に野尻の城主に福永丹波守祐友は、此由を聞き伊東殿の御家滅亡すべし時節は此時也、我度々諫言しけるに、忠言耳に逆ひ、却て不興を蒙り、此三年せが程は對面なし、我れ賤くも人界に生を得、忠臣の道を盡し、君を諫むる甲斐もなし、無念至極に思へ共、是も譜代の主君なれば、恨みる所は更になし、傳へ聞けば伊東殿、未だ前非を悔ひ給はず、再び羅摩に發向

せんこの企て有るよし「君辱しめらるゝ時は  
臣以て死す」と云ふ事もあり「我れ家臣の身と  
して、今一度諫めざらんも、恥辱の至りなる  
べしと、一通の諫言状を認めて、態と名字は  
書ざりしが、夜半にまぎれて忍び入り、伊東  
殿の門前に立置して「宿所をさして歸りける」  
兎にも角にも漏氷が所存の程こそ、天晴剛の  
勇士かをと「皆一同に感じける」。

●常陸丸

征露の軍よりくた、進みくして南山の險  
阻もすてに打破り、音に聞えし要害の、旅順  
口も閉ざれて、鷲の棲むてふ滿洲も、君が御  
稜威の旗風に今は「靡かぬ草もなし」「心筑  
紫の島はなれ、玄海灘のた、中に、吹く沙風

に日の丸の、旗翻す常陸丸」佐渡も續いて進  
み行く、船路のはては遠からむ「何を荒ぶる  
荒沙の、逆巻く中の黒煙、只一筋に走り来て  
我をこりまく敵の艦、こは何事と云ふ間なく  
亂射亂撃雨あられ、進み遁れむひまもなし、  
千里を走る猛獸も、水に入りては如何にせん  
萬里をかける大鷲も、浪には翼折れぬべし、  
心ばかりは早れごも」「運送船の悲しさは、  
進退茲に谷まりて、詮方なくも敵艦に、任せ  
果てしぞ是非もなし」佐渡はいかにと眺むれ  
ば、霧にへたゞり分かれごも「同じ様なる運  
の末」輸送指揮官須知中佐、是迄なりとや思  
ひけむ、大久保少尉の捧げたる、聯隊旗をば  
手に受けて、都の方を伏し拜み、火を放ちて  
ぞ焼きたれば、各將校もこりくた、貴重

品々焼き捨てぬ。この有様を打見つゝ、中佐は軍刀抜き放ち、無念の泪はらくらくと落ち、袖にうち拂ひ、萬歳唱へ悠々と、腹掻き切つてぞうせにける。一列なる將校初めとし、下士兵卒にいたるまで、同じ枕に伏すもあり、海に投じて死すもあり、敵弾ますく加はれば、甲板は忽に、屍の山をきつきつゝ、流る。血汐に支海の、浪は朱にぞ染みにける、哀れ果敢なや常陸丸。君萬歳の聲細く、我忠勇の將士等が、無限の恨みうち乗せて、潮の泡と消えにしば、明治三十一年七月七日の、水無月十五日の暮つかた、夕日は浪に落ちされ、霧立ち覆ふ海原は、あやめも分かね計りなり、げに忠烈の武士が、十年の間朝夕に、磨ききたへし日本刀、試さむ敵を前に見て、

遺恨の刃一と太刀も、報いむ事もなくばかり、一駒の蹄に滿洲を、踏みにじらむも夢なれや、ウラルバイガル打越えむ、あらましこも訂か「思へば無念の極みなり」嗚呼一聯隊の我勇士、氷積屍と消えしかこ、國に殉せし大丈夫が、清きその名は萬代も、響の洋にたつ浪の、絶ゆる時なく仰がれむ「未迄遠く流るらむ」。

●廣瀬中佐

七度此世に生更はり、朝廷の敵を殄さんこ、云ひしは楠公兄弟の「最期の際の誓ひなり」此語に感じ吾も亦、七生國に報せんこ志操固めし其人は、海軍中佐廣瀬君「こし旅順の攻撃に、港口閉塞試さむこ、決死の勇士

を糾合し、沈むる船の長さなり、龍の頭を探るにも、虎の口鬚弄るにも、劣らぬ危険を衝き冒し「從容任務を果したり」「されど成功未だし、二度其舉を懇請し、敵の航路に深く入り、首尾よく目的を達しけり」「歸るに臨み一人の部下見えすこて二度三度、棄てたる船に立返り、浪を踏むまで捜したり、船はや沈み果てむとす、今は是非なし是迄こ、涙を揮ひ歸途に就く、此時敵彈雨霰、數多の士卒を損せじと、身をもて蔽ふ一刹那、一丸烈しく掠め去り「遣るは些少の皮肉のみ」「アナ悼ましや春の夜の、ツレなき嵐に散る櫻、智仁勇兼備せし、日本大丈夫失せにけり、此日は彌生の末七日、鬼神も泣き天地も、慘愴として此恨、何の代にかは盡ぬべき」後半ク

月旅順港、又我軍に襲はれて、敵將マカロフ以下千餘、旗艦と共に沈没す、斯かる勝利は前日の、閉塞與り力あり、又敵軍の運命を、中佐の靈もや誘ひけむ「七生報國誓ひてし、其徵證まづ顯はれぬ、尙忠魂は此後も、トハに皇國を護るらむ」嗚呼其志操其行爲「實に軍人の模範なり」千秋萬古語り繼ぎ、無數の廣瀬世々出でむ、千秋萬古語り繼ぎ「無數の廣瀬世々出でむ」。

### 四絃界前編終

明治四十二年十月一日印刷

明治四十二年十月五日發行

隨處經四結界

定價一册金壹拾錢

國語研究會代表者

編輯者 佐竹操

不許

複製

大坂市東區北久太郎町四丁目五十一番地

發行者 岡本仙

大坂市西區北堀江下通二丁目六番地

印刷者 南谷新七

大坂市東區北久太郎町四丁目心齋橋筋東入

發行所 岡本偉業館

電話東二一八七番

新豐貯金大坂三九九二番





